

『石川啄木事典』正誤表

- ・加藤喜一郎氏(元税務大学校教授・故人)の「正誤表」(注1)を元に、そこから採用・不採用を判断しながら作成した。また、「正誤表」引用歌番号一覧」の作成過程で新たに見つかった正誤や内容補訂なども含めた。
- (注1)本学会理事佐藤勝氏のブログを参照。(https://takuboku.hateblo.jp/entry/2024/07/12/163308)
- ・『石川啄木事典』「正誤表」等作成ワーキンググループ(執行部:若林・安元・塩谷)が「引用歌番号一覧」を併せて作業を行った。
- ・今号は正誤を網羅的に調べることはしていない。正誤の調査は今後も行っていく予定である。お気づきの点があれば情報を学会事務局までご連絡いただきたい。

〔凡例〕

- ・行:空白行は数えない。*は後ろから数える。
- ・(誤)(正):■一字アキ、□不明文字。ルビは当該文字の後に()で示す。
- ・(正):引用の仕方を次のように統一した。
- ①項目執筆による原文の省略は(略)とする。
- ②原文中の「」(カギ括弧)・『』(二重カギ括弧)はそのまま引用する。原文の「」を『』に直さない。
- ③原文の改行は「 / 」(スラッシュ)で表す。
- ④原文の傍点、圏点は省く。

No.	頁	段	行	(誤)	(正)
1	13	下	6	灯影なき室に我あり	熾影なき室に我あり
2	35	上	3	木陽	大洋
3	54	上	4	千速健	千早健
4	66	下	4	歯がたたなかつた	歯がたたなかつた
5	76	下	11	広瀬中佐	白瀬中尉
6	78	上	*6	女子	女史
7	118	上 下	2~*1	呷	呷
8	119	下	3	書いてみたくなりて、／ペンを	書いてみたくなりて、／■ペンを
9	121	下	*9	眼さまして直ぐの心よ!／年寄りの	目さまして直ぐの心よ!／年よりの
10	121	下	*2	宿屋安けし／わが家のごと	宿屋安けし／我が家のごと
11	122	下	8	城跡の	城址の
12	125	下	*3	塵墨	塵墨
13	134	上	*4	元日の朝晴れて風無し	元日の朝、晴れて風無し。]
14	134	下	12	羽子突く音す／笑ふ声す。	羽子突く音す／笑ふ声す
15	134	下	*2	慰藉	慰藉
16	137	上	4	紫になむうつづの	紫にはなむうつづの
17	141	上	3	「眼閉づれど／心にかぶ	「眼閉づれど、／心にかぶ
18	141	上	4	さひしくもまた眼をあけるかな。」	■さひしくも、また、眼をあけるかな。」
19	142	下	11	精神的共鳴者のイメージとしては形象	精神的共鳴者のイメージとして形象
20	143	下	*3	旅を思ふ夫の心!叱り、泣く、	旅を思ふ夫の心!／叱り、泣く、
21	148	上	12	／煙管をみがく]	／煙管をみがく。]
22	148	下	3~4	／壁の虫より杖つきて出づ]	／壁のなかり杖つきて出づ]
23	149	上	2	「かなしきは我が父!／今日も新聞を読みあきて、／庭に	「かなしきは我が父!／■今日も新聞を読みあきて、／■庭に
24	149	上	3	「その親にも、／親の親にも	「その親にも、／■親の親にも
25	149	下	9	かくて寒さのたえ難き世や	かくて寒さのたえ難き世や。
26	150	上	1	如何ようであったかゝ与	如何ようであったかゝ。与
27	150	上	*9	／小櫛の蝶を夢に見しか	／小櫛の蝶を夢にみしか
28	151	上	*10	／空を見上ぐる男ありたり	／空を見上ぐる男ありたり
29	152	下	1	／テロリストの悲しき心も……	／テロリストの悲しき心も……
30	152	下	4, 6, 7	……	……
31	152	下	11	モからこれからのイメージが	モからこれらのイメージが
32	153	上	*9	……	……
33	153	上	*5	「時として、電のほとぼる如く」	「時として、電のほとぼる如く」
34	153	下	*7	衰れた姿が歌われようになる。	衰れた姿が歌われるようになる。
35	154	下	*9	今日も耳鳴る／かなしき日かな	今日も耳鳴る／かなしき日かな
36	156	上	6	ふと人こひし／街に出てゆく」	ふと人こひし／街に出てゆく」
37	156	上	7	らぬ／街など今日も	らぬ／街など今日も
38	156	上	11	「無題(屋根又屋根……)」	「無題(屋根又屋根、眼界の……)」
39	156	下	*2	ふと見れば／とある停車場の	ふと見れば／とある某の停車場の
40	157	下	9	／飢ゑたる時は	／餓ゑたる時は
41	157	下	8	朝に来し／友のなさけの	朝に来し／■友のなさけの
42	158	下	8	とか「友も、妻も、	とか「友も妻も
43	158	下	9	思ふらし——／病みても猶、／革命の	思ふらし——／■病みても猶、／■革命の
44	160	上	*11	泣(な)きなむとすと家(いえ)を出(い)でにき	泣(な)きなむとすと家(いゝ)を出(い)でにき ※「家」のルビの訂正
45	160	下	6	くなれり	くなれり
46	161	下	*2	猫の耳を引つぱりてみて／にやと啼けば、	猫の耳を引つぱりてみて、／にやと啼けば、
47	161	下	*1	ふ子供の顔かな	ふ子供の顔かな。
48	162	上	2	その猫がまた争ひの種となるらむ。	その猫がまた争ひの種となるらむ。
49	163	上	*8	見入る	見入る。
50	164	上	3	小説家として自立しようとし	小説家として自立しようとし
51	164	下	4	／家持たぬ	／家持たぬ

No.	頁	段	行	(誤)	(正)
52	165	上	*6	／はじめて友に打ち明けし	／はじめて友にうち明けし
53	165	下	2	「追憶は、慰藉を生み、生命を生み、遂に	「追憶は、慰藉を生み、(略)、生命を生み、遂に
54	167	上	3	いたく口びし	いたく鐘びし
55	167	上	5~6	／人生終わる	／人生終る
56	167	上	9	「口びピストル」は	「鐘びピストル」は
57	167	下	10	ナショナリズムは、「口び	ナショナリズムは、「鐘び
58	168	上	9	／病人の目にはてしなき	／病人の目にはてもなき
59	169	下	*3	古き帽子も／捨てられぬ	古き帽子も／棄てられぬ
60	170	上	*9	紫衣破帽	紫衣破帽
61	171	上	8	「此少詩人の前	「此年少詩人の前
62	172	上	7	詩「眠れる都」ように	詩「眠れる都」のように
63	173	下	12	日毎に土のくづること	日毎に土のくづること
64	174	上	7	神の降ったところ、済むところとし	神の降(くだ)ったところ、棲むところとし
65	174	上	*6	水之江裕有一編	水之江有一編
66	174	上	*3	クリスプ・相馬寿明訳	クリスプ・相馬寿明訳
67	174	下	*10	は、「かかくに	は、「かにかくに
68	175	下	*7	己の中に「獣」の飼って	己の中に「獣」を飼って
69	175	下	*1	■七八月かな。	七八月かな。
70	176	上	*10	「なにとなく君に待たるるこゝろして	「なにとなく君に待たるるこゝろして
71	179	下	*4	明治末年	明治末年
72	185	上	8	Wordworth	Wordsworths
73	186	上	1	Maupassant	Maupassant
74	186	上	9	一九一一年(明45)	一九一一年(明44)
75	186	上	11	一九一二年(明44)	一九一二年(明45)
76	192	下	*4	傍の葉の木の下の	傍の葉の樹の下の
77	199	上	12	このような創作上の、さらに生活上の	このような創作上の、さらに生活上の
78	204	下	*10	Wordsworth	Wordsworths
79	206	下	*3	日記や断片中で繰り返し	日記や断片中で繰り返し
80	211	下	10	「霊性の慰藉	「霊性の慰藉
81	214	上	5	一元二面観・個人主義	一元二面観・個人主義
82	215	下	*9	居る者がある。……かかゝる時に	居る者がある。(略)かゝる時に
83	216	上	11	旅順口外で触雷で沈んだ	旅順口外で触雷で沈んだ
84	216	下	*7~*6	日露戦争ニマコフ提督追悼詩をめぐってニ	日露戦争ニマコフ提督追悼詩をめぐってニ」※長音記号をダッシュに直す。
85	221	下	1	いずれもその多くは「明星」の発表された	いずれもその多くは「明星」に発表された
86	224	上	1	年(明44)秋の変貌を	年(明42)秋の変貌を
87	226	下	1	ほぼヨーロッパ全域および	ほぼヨーロッパ全域および
88	236	中	2~3	その損害は意外に大	その損害は意外に大
89	238	上	3	間の主筆ならば／やらむ	間の主筆ならば／やらむ
90	238	下	*2	安政七年一歳で得度(大泉院)龍谷	安政七年一歳で得度(大泉院)。龍谷
91	240	下	*4	作戯。本名は	作戯。本名は
92	241	下	*2	「百回通信」(明42・10・11)に	「百回通信」(明42・10~11)に
93	242	下	*1	紫幸石	紫幸正
94	243	上	*1	所信にも(並木武雄が)岩崎君	所信にも(並木武雄が)「岩崎君
95	243	中	2	言って、英雄の相なんだぞうだ。」と。	言つて、英雄の相なんだぞうだ。」と。
96	243	中	4	といふ意味だぞうだ。」などと、	といふ意味だぞうだ。」などと、
97	243	中	7	なつかしき兄の書信に接し、	なつかしき兄の書信に接し、
98	244	上	6	キ■メー■ロトル	キロメートル
99	248	上	9	一九二〇年(明43)	一九〇九年(明42)
100	249	中	*3	一九〇六年(明39)	一九一〇年(明43)
101	249	中	*1	宮崎八百吉に寄寓し	宮崎八百吉方に寄寓し
102	251	上	*9	函館大火におり、	函館大火のおり、
103	251	上	*4~*3	盆踊りを待ちわびる娘心と	盆踊りを待ちわびる娘心と
104	252	下	*7~*6	『ナショナル第三リーダー』からの転写	『ナショナル第三リーダー』からの転写
105	254	下	4	そして一九〇三年はかれも退職して	そして一九〇三年にはかれも退職して
106	255	上	1	別に花叢	別に花叢
107	258	上	*7	たみを遠くおもひ出づる日	たみを遠くおもひ出づる日
108	259	下	9	消えた許ばかりの青草一つ無い國から初夏	消えた許りの、青草一つ無い國から、初夏
109	259	下	10	の都に行く自分には「此萩の浜の	の都に行く自分には、「此萩の浜の
110	259	下	11	年の春であつた。」	年の春であつた。」
111	262	下	5	献じ併せて遂に	献じ併て遂に
112	265	上	*2	小樽に入り候ひし」金田	小樽に入り候ひし」金田
113	267	下	6	信太郎(昭13・5)「尋常	信太郎(昭13・5)「尋常
114	268	上	5	「青葉茂れる、桜井の…」で	「青葉茂れる、桜井の…」で
115	268	中	*11	小野弘吉を弟ふ文が出ている。ああ小野	小野弘吉君を弟ふ文が出ている。ああ小野
116	268	中	*10	君！これらの人数、最も先に小野君と親し	君！■これらの人数、最も先に小野君と最も親し
117	268	中	*9	かつたのは誰か？小野君は	かつたのは誰か？■小野君は
118	268	中	*8	二十六日に葬られた。農科の三年だつ	二十六日に葬られた。農科の三年だつ
119	269	下	7	九月六日から同年六月一五日迄	九月六日から翌年六月一五日迄

No.	頁	段	行	(誤)	(正)
120	270	上	8~11	また、昭和の初期には、梶井基次郎も蓋平館別荘に下宿して、名作の「檸檬」を書き残している。	削除
121	271	下	5	啄木は第一次桂内閣に「内	啄木は第一次桂内閣を「内
122	271	下	6	隠忍外倔傲も事に当りて	隠忍外倔傲然も事に当りて
123	271	下	7	民村より「明42・4」と評し、	民村より「明37・4」と評し、
124	272	上	*5	三年(昭8・5日不明)。啄木入社当時の	三年(昭8)月日不明。啄木入社当時の
125	273	上	4	啄木と交友の家人は	■啄木と交友の家人は
126	273	上	10	六時出生の事に。午後、説子幸子二嬢	六時出生の事に。／■午後、説子幸子二嬢
127	273	上	11	わざ迎へに来られて、	／■迎へに来られて、
128	273	上	*11	かる。年始の御馳走なり。鰻の汁の物。	が「ママる。年始の御馳走なり。鰻の汁の物。
129	273	上	*9	金矢家の好意は	／■金矢家の好意は
130	274	上	*6	(小倉山百人一首)	(小倉百人一首)
131	275	中	*4	綱かけて	綱かけて
132	275	下	1~2	「日本無政府主義附帯現象及陰謀事準」	「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」
133	275	下	3~4	小林純治外二名検査され、	小林五治外二名検査せられ、
134	275	下	5	主義者たちと	主義者なりと
135	275	下	10	帝国大学議内	帝国大学議内
136	275	下	*7	脈をとる看護婦の手の／あたたかき	脈をとる看護婦の手の、／あたたかき
137	276	上	*3	看護婦が徹夜するまで	看護婦の徹夜するまで
138	276	上	*2	わるくなれどもひそかに	わるくなれども、ひそかに
139	283	中	6	執着は蒲原有明の対話のなかで	執着は蒲原有明との対話のなかで
140	284	上	1	誤り「喜之床」の創始者	誤り。「喜之床」の創始者
141	284	中	6	この家で「時代閉塞」「一握の砂」	この家で「時代閉塞の現状」「一握の砂」
142	284	中	*10~*9	畑瀬惣平が武富私道の下手に	畑瀬惣平が釧路の武富私道の下手に
143	286	上	5	め、当時日露戦争の	め、当時日露戦争の
144	286	上	6	單身赴任く。	單身赴任く。
145	286	上	*10	と題する。彼の随想に	と題する。彼の随想に
146	286	中	9~10	盲目の	盲目の
147	286	下	*11~*8	歌集『一握の砂』には／■函館の宮崎郁雨と並べて 同国の友花明／■金田一京助君／■という献辞を	歌集『一握の砂』には函館の宮崎郁雨と並べて／■ ■同国の友文学士花明金田一京助君という献辞を
148	288	上	*4	事業令が分布されたために	事業令が公布されたために
149	288	中	*3	(天峯)の幹旆によって	(天峯)の幹旆によって
150	288	下	9	筆だよりと題して	筆便りと題して
151	289	中	*5~*3	一九四四年(昭13)新聞事業法の戦時改正によって北海道新聞社と統合されるまで	一九四二年(昭17)北海道新聞社に統合されるまで
152	291	上	9~10	肺炎カタル	肺炎カタル
153	292	上	*3	クロボトキン(Kropotkin, Pyotr Alekseevich)	クロボトキン(Kropotkin, Pyotr Alekseevich)
154	292	上	*2	〜一九二一年ロシアの自然科	〜一九二一年、ロシアの自然科
155	294	上	*6	祐仁親王	祐仁親王
156	294	上	*4	祐仁親王	祐仁親王
157	294	下	8~9	『ファウスト』(一八〇八、三二)に	『ファウスト』(一八〇八、三二)に
158	296	中	2	初対面	初対面
159	299	中	8	好摩駅前商店街を二キロほど西	好摩駅前商店街を一キロほど西
160	299	下	8~9	岩手県南岩手郡本宮(現、盛岡市)	岩手県南岩手郡本宮村(現、盛岡市)
161	300	上	*8~*7	「かの旅の汽車の車掌がゆくりなくも我が中学の友なりしかな」	「かの旅の汽車の車掌がゆくりなくも／我が中学の友なりしかな」
162	300	中	*10	吸われし	吸はれし
163	302	上	12	Kropotkin□The terror	Kropotkin, The terror
164	302	上	13~14	1909, the Parliametary Russian Committee	1909, the Parliamentary Russian Committee.
165	302	下	6	／おどけ歌をよみ出でし／	／おどけ歌をよみ出でし／
166	303	下	9	Gobineau, Joseph Arthur	Gobineau, Joseph Arthur de
167	303	下	*6	Hu-man Races	Human Races
168	304	中	9	舞へといへば立ちて舞ひにき	舞へといへば立ちて舞ひにき
169	306	上	*4	館に行つてある……君の世話で	館に行つてある(略)君の世話で
170	306	中	*4	彦蔵大娘	彦蔵大娘
171	306	下	8	『北海タイム』	『北海タイム』
172	308	上	10~11	などの漢詩に用いられたほか、	などの漢詩に用いられたほか、
173	308	中	*5	佐々木喜善(ささき きよし)	佐々木喜善(ささき きざん)
174	308	下	12	『聴耳草』	『聴耳草』
175	310	上	*6	何にか例へむ。	何にか例へむ。
176	310	上	*6~*5	アカシアの並木を	アカシアの並木を
177	311	上	2	一八六九年二月一日(明1・12・20)~	一八六九年二月三日(明1・12・22)~
178	311	下	*3~*2	書簡に、「五月雨も二十五日(発行)の由」とあり、	書簡に、「五月雨も二十五日の由」と発行日があり、
179	312	上	5~7	「パンの会」が日本橋のレストラン、メイン通りの裏で開かれた。	「パンの会」が函館の西洋料理店、第一やまとで開かれた。
180	312	上	10	あたらしきサラダの色の／うれしさに、	あたらしきサラダの色の／■うれしさに、
181	316	中	10	落成移転する。	落成移転する。

No.	頁	段	行	(誤)	(正)
182	316	下	7	の幼かった頃は、	の幼かった頃は、
183	316	下	8	程面倒な手続も要らなかつ様である。	程面倒な手続も要らなかつ様である。
184	316	下	9	私の様に(か)弱い	私の様に(か)弱い
185	316	下	10	ない事であった。」	ない事であった。」
186	329	上	*1	るのだ、とう意気込み	るのだ、とう意気込み
187	329	下	*1	た、東洋の思想を西洋の哲学に導入にした	た、東洋の思想を西洋の哲学に導入した
188	334	上	8	一九〇三年(明36)年には	一九〇三年(明36)には
189	335 ~6	下 上	*8~14	数奇屋橋	数奇屋橋
190	337	上	3	啄木はこのストライキについて、に	啄木はこのストライキについて、
191	337	上	7	学年試験は有耶無耶の間に	学年試験は無耶々々の間に
192	337	上	10	それを耽りて教場に出づる事益々稀なるに	それを耽りて教場に出づる事益々稀れなるに
193	339	中	*1	高等受験料に	高等受験料に
194	340	中	*4~*3	丸の内馬場先門前に	丸の内馬場先門前に
195	341	上	3~4	オルガノ本社ビルにあった下宿屋。	オルガノ本社ビル)にあった下宿屋。
196	341	上	8	(金田一京助『石川啄木』)下宿代	(金田一京助『石川啄木』)下宿代
197	345	上	11	一年(明44)に	一年(明44)に
198	345	下	*9	は一九〇三(明36)年で	は一九〇三年(明36)で
199	347	下	*4	所在地は西根町平館	所在地は岩手県岩手郡西根町平館
200	351	上	*2	ました。」	ました。」
201	353	中	*3	(大11)二月一日。	(大11)一月一日。(注2)
202	353	下	*1	顔の寒き／流離の旅の人として	顔の寒き／流離の旅の人として
203	354	上	*5	かの声をも一度聴かば／すつきりと	かの声をも一度聴かば／すつきりと
204	355	上	3	〔空中書に〕	〔空中書〕
205	359	下	*4	「洪民日記」によると洪民小学校	「洪民日記」によると、啄木は洪民小学校
206	359	下	*3	員であった四月二一日	員であった明治三十九年四月二一日
207	360	中	6	桑木敏賢	桑木巖賢
208	360	下	5	五〇キ■メー■ロトル	五〇キロメートル
209	362	下	*5	ペテルブルグ	ペテルブルグ
210	364	上	5	はづれまで一度ゆきたしと／思ひみし	はづれまで一度ゆきたしと／■思ひみし
211	364	上	6	／かの病院の長廊下かな	／かの病院の長廊下かな。
212	365	上	11~12	秋近し！／電燈の球のぬくもりの／触れば	秋近し！／■電燈の球のぬくもりの／■さはれば
213	366	下	2~3	起つた。……起て、起て、と心が喚く。	起つた。(略)起て、起て、と心が喚く。
214	366	下	5	北海道で貧乏した方がよい	北海道まで来て貧乏してゐるよりは東京で貧乏した方がよい
215	366	下	*8	一九〇四年五月四日~	一九〇八年五月四日~
216	366	下	*7	本郷菊坂町八十二番地	本郷菊坂町八二番地
217	366	下	*3	本郷弓町二丁目一八番地	本郷弓町二丁目一十番地
218	367	下	7	一九一二年四月一三日	一九一二年(明45)四月一三日
219	368	下	2	歌謡「歌のいろいろ」が掲載された。	歌謡「歌のいろ／＼」が掲載された。
220	369	上	*1	開化政策推進に利用できる	開化政策推進に利用できる
221	371	下	*5	其要は、從來	其要は、從來
228	371	下	*2	否認し「働くといふも	否認し「働くといふも
223	371	下	*1	仕事ありての事なり」という説を、	仕事ありての事なり」という説を、
224	372	中	11	の思潮をもたらされ、	の思潮をもたらし、
225	372	中	12	が国の古い伝統による文学とは全く異なる文	が国の古い伝統による文学とは全く異なる文
226	372	中	13	学が生まれてきので	学が生まれてきたので
227	373	上	2	六月八日	六月八日
228	373	上	10	年九月早稲田大学	年九月早稲田大学
229	374	下	13	蘇峰の書を我に	蘇峯の書を我に
230	374	下	14	／まずしさのため	／まつしさのため
231	377	上	*5	／語り聞かせし／	／かたりきかせし／
232	385	下	7	一九二六年(昭1)	一九二六年(大15)
234	385	下	8~9	一九四二年八月	一九四二年(昭17)八月
235	385	下	*5	『評鑑石川	『評伝石川
236	389	中	*2	玉をあざむく少人も／	玉をあざむく少人も／
237	390	中	1	五日市市一一五三一一三)。	五日市市一一五三一一三)。
238	390	中	9	筋骨薄弱に丙種合格	筋骨薄弱で丙種合格
239	390	中	*2	裁判所検察局は、	裁判所検事局は、
240	391	上	*4	で帰つた。……滞在中感じたことは	で帰つた。(略)滞京中感じたことは
241	391	上	*1	得ない。	得ない。」
242	391	中	1	近刊の小説類も	「近刊の小説類も
243	391	中	2	島崎藤村二氏だけ学殖ある	島崎藤村二氏だけ、学殖ある
244	391	中	4~5	しかし『偉大』がない。島崎氏も充分望みがある。『破戒』	しかし『偉大』がない。島崎氏も充分望みがある。『破戒』
245	391	中	8	が然し……然し……矢張	が然し……然し……矢張
246	391	中	9	間違つて居なかつた。	間違つては居なかつた。

No.	頁	段	行	(誤)	(正)
247	391	中	11	いう決心が帰郷の際唯一の予の	いる決心が、帰郷の際唯一の予の
248	401	中	*2~*1	八〇日間の記	八土日間の記
249	401	下	3~4	短小な体から出す。……畠山が一番この村で	短小な体軀から出す。(略)畠山が一番この村で
250	401	下	5	片眼で、財産は殆ど皆無。	片眼で、財産は殆んど皆無。
251	401	下	6~7	学識のある文壇々世上群犬の心を解しかかねる二つ つまり	学識のある文壇々世上群犬の心を解しかかねる二つ つまり
252	403	下	*5	小石川五丁目十一番	小石川五丁目二番
253	404	上	1	四月十三日	四月二三日
254	406	上	10	一九〇一(明44)年	一九〇一年(明44)
255	406	中	8	その子於菀	その子於菀
256	407	中	15	ピラミドン零コマニ、	ピラミドン零コマニ、※漢数字の「二」
257	407	中	16	解熱剤に違ひない。」	解熱剤に違ひない」
258	407	下	2	二十九歳	一九歳
259	408	上	8	き顔に涙を光らせて	き顔に涙を光らせて
260	408	上	*9	(大1・八)を	(大1・8)を
261	411	中	10	している。	している。
262	414	下	*5	で在れずとも多かつた	で在れずとも多かつた
263	415	上	8~9	「瘦達摩」	「瘦達摩(ママ)」
264	417	上	6	駒込などを	駒込などを
265	420	上	4	一九〇二年(明35)一月七日	一九〇二年(明35)一月二七日
266	420	上	6	Shakespeare	Shakespeare
267	420	上	8	を買ってきた。若い者が	を買ってきた。若い者が
268	420	上	9	入つて、つらつら	入つて、つらつら
269	420	上	11	あゝ自分も	あゝ自分も
270	422	下	3	三日月(みかずき)	三日月(みかずき)
271	425	下	*8	雄、古川力佐の四人	雄、古川力佐の四人
272	426	下	6~7	大嶋経男	大嶋経男
273	426	下	7	盲僧社	盲僧社
274	426	下	*7	向井の下宿に啄木は	向井の下宿に啄木は
275	427	下	*9	啄木は藤田武治・治作宛	啄木は藤田武治・高田治作宛
276	427	上	*8	「東京は武蔵野にある故に	「東京は武蔵野にあるが故に
277	427	上	*6	時勢の推移は山一つ来る毎に、	時勢の推移の山一つ来る毎に、
278	427	上	*5	我等のエフェレスト	我らのエフェレスト
279	428	上	9	「八時過ぎ、	「八時過、
280	428	上	10	持つてつて鵜外先生の留守に	持つてつて鵜外先生の留守空に
281	430	下	*4	■とあり、開校式は	とあり、開校式は
282	431	上	6	出デラザルヲ知らシヤ	出デザルヲ知らシヤ
283	431	下	*7	生徒相集リ、文ヲ讀シ武ヲ修メ志気ヲ振ヒ、	生徒相集リ、文ヲ讀シ武ヲ修メ志気ヲ振ヒ ※カタカナの「リ」。また「校友会会則」原文に読点、濁点なし。
284	432	中	*6	爆裂強！」とみづから	爆裂強！」とみづから
285	432	下	*8	そのまま	そのまま
286	434	下	2	一八六八年八月二五日(明1・7・8)	一八六八年八月二五日(慶応4・7・8)
287	438	上	13~14	その後、我を捨てし友も、あのころは共に書読み／共にあそびき	その後、我を捨てし友も、あの頃はともに書読み／ともに遊びき
288	439	中	13	真似をしてみぬ、＝／＝／妻子の留守に。	真似をしてみぬ、＝／＝／■妻子の留守に。
289	443	上		バルトン氏	バルトン氏
290	445	中	*6	「労働者」「革命」などといふ言葉を	「労働者」「革命」などいふ言葉を
291	445	中	*5	五歳の子かな	五歳の子かな。
292	492	下	2	拾化三年刊	弘化三年刊
293	526	下	*5	盛岡市立第一高等学校	岩手県立盛岡第一高等学校
294	527	下	*2	◇作家手帖	◇作談手帖
295	535	上	*9	日麻での	日までの
296	615	下	9	四月一日、節子盛岡仁王尋常小学校を卒業した節子は、	四月一日、盛岡仁王尋常小学校を卒業した節子は、
297	632	上	10	一〇月二七日、長男真一死去。	一〇月二八日、長男真一死去。(注3)

(注2) 山下多恵子「啄木の「と」——『かなしき時は君を思へり』のことなど」『国際啄木学会研究年報』第24号、2021、に拠る。
(注3) 大室精一「啄木の長男真一の命日 寸感」『国際啄木学会東京支部会報』第28号、2022、に拠る。(同編者「啄木と節子まるわかり年譜」桜出版、2022、pp.254-256、にも収載。)
※石川啄木の引用は『石川啄木全集』(筑摩書房、1978-80)に拠った。その他の引用も適宜原文に拠った。
※「啄」は本来は牙付き。書体が無いので「啄」で代用した。

『石川啄木事典』引用歌番号一覧

『石川啄木事典』に引用された『一握の砂』『悲しき玩具』掲載歌・収載歌の歌番号を示す。歌番号は久保田正文編『新編啄木歌集』（岩波文庫、1993）に拠る（注）。

〔凡例〕

・行：空白行は数えない。＊は後ろから数える。

・引用歌：■は一字アキ。二句までで示し、ルビは省略する。引用に誤植等がある場合は訂正して示す。「正誤表」も参照されたい。

・引用元：『一握の砂』『悲しき玩具』以外からの引用を示す。

No.	頁	段	行	引用歌	引用元	『一握の砂』	『悲しき玩具』
1	13	下	6	燈影なき室に我あり	『石破集』『明星』明41.7	13	
2	14	下	3	さらさらと雨落ち来り	『虚白集』『明星』明41.10	267	
3	14	下	5	世の初め先づ森ありて	『虚白集』『明星』明41.10	299	
4	14	下	6	かなしきは秋風ぞかし	『虚白集』『明星』明41.10	255	
5	15	上	*2	尋常の戯けならむや	『夏復問』『スハル』明42.5	81	
6	16	下	8	死ね死ねと己を怒り	『穂かならぬ目付』『東京毎日新聞』明43.4.24	71	
7	16	下	10	しつとりと水を吸ひたる	『穂かならぬ目付』『東京毎日新聞』明43.4.24	70	
8	16	下	11	とかくして家を出づれば	『穂かならぬ目付』『東京毎日新聞』明43.4.24	84	
9	16	下	12	何やらむ穂かならぬ	『穂かならぬ目付』『東京毎日新聞』明43.4.24	87	
10	18	下	4	東海の小島の磯の	—	1	
11	18	下	10	目になれし山にはあれど	—	265	
12	18	下	13	こみ合へる電車の隅に	—	21	
13	18	下	14	病のごとく思懐のころ	—	152	
14	18	下	*5	潮かをる北の浜辺の	—	304	
15	18	下	*3	曠野より帰るごとくに	—	526	
16	20	上	*7	途中にてふと気が変り、	『一握の砂以後（四十三年十一月末より）』		3
17	20	上	*6	庭のそとを白き犬ゆけり。	『一握の砂以後（四十三年十一月末より）』		194
18	20	下	1	わが友は／今日も母なき	—	543	
19	20	下	*6	そんならば生命が欲しく	—		90
20	20	下	*4	お菓子貰ふ時も忘れて、	—		162
21	20	下	*3	やや遠きものに思ひ	—		147
22	21	上	3	いま、夢に閉古鳥を聞けり。	—		131
23	21	上	8	眼閉つれど、／心に向かふ	—		2
24	22	上	*2	頬にたつたふ／なみだのこはず	—		2
25	22	下	1	夜おそく／つとめ先より	—	544	
26	23	上	*5	呼吸すれば、／胸の中にて	—		1
27	23	上	*4	眼閉つれど、／心に向かふ	—		2
28	117	下	9	ものなべてうらはかなげに	—	259	
29	117	下	11	父のごと秋はいかめし	—	290	
30	118	上	5	路傍に犬ながながと	—	60	
31	118	上	7	百年の長き眼りの	—	45	
32	118	上	9	空寝入生味呻など	—	67	
33	118	上	11	いらだてる心よ汝は	—	140	
34	119	上	10	取りいでし去年の袷の	—	503	
35	119	上	*5	ある朝のななき夢の	—	108	
36	119	上	*1	旅を思ふ夫の心！	—		7
37	119	下	3	何か、かう、書いてみたくなりて、	—		169
38	119	下	*9	かぎりなき智識の欲に	—	179	
39	120	上	7	船に酔ひてやさしくなれる	—	309	
40	120	上	*8	クリストを人なりといへば、	—		192
41	120	下	5	雨に濡れし夜汽車の窓に	—	334	
42	120	下	13	たんたらたらたんたらたらと	—	118	
43	121	上	1	さらさらと雨落ち来り	—	267	
44	121	上	10	馬鈴薯のうす紫の	—	234	
45	121	下	7	大海にもかひて一人	—	3	
46	121	下	8	夜明けまであそびてくらす	—	131	
47	121	下	11	猫を飼はば、／その猫がまた	—		179
48	121	下	*9	目さまして直ぐの心よ！	—		63
49	121	下	*5	父のごと秋はいかめし	—	290	
50	121	下	*3	名のみ知りて縁もゆかりも	—	371	
51	122	上	6	人みなが家を持つてふ	—	132	
52	122	上	7	家にかへる時間となるを	—		56
53	122	下	7	今日ひよいよと山が恋しくて	—		31
54	122	下	8	城址の／石に腰掛け	—	165	
55	122	下	*9	松の風夜昼ひびきぬ	—	295	
56	123	上	3	路傍に犬ながながと	—	60	
57	123	上	9	われ眠れてある日に／細き	—	279	
58	123	下	9	庭のそとを白き犬ゆけり。	—		194
59	124	上	12	馬鈴薯のうす紫の	—	234	
60	124	上	*5	赤紙の表紙手擦れし	—	507	
61	124	上	*3	痛む歯をおさへつつ、／日が	—		9
62	124	上	*1	宗次郎に／おかねが泣きて	—	227	
63	124	下	2	マチ擦れば／二尺ばかりの	—	541	

No.	頁	段	行	引用歌	引用元	『一握の砂』	『悲しき玩具』
64	124	下	11	やはらかに柳あめを	—	215	
65	125	上	7	あの頃はよく嘘を言ひき。	—		82
66	125	上	*10	或る市にあし頃の事として、	—		173
67	125	下	6	もう嘘をいはいと思ひき——	—		108
68	125	下	7	何となく、／自分を嘘の	—		109
69	125	下	9	今までのことを／みな嘘に	—		110
70	125	下	11	新しき明日の来るを	—		29
71	126	下	8	我と共に／粟毛の仔馬	—	222	
72	127	上	5	大海にむかひて一人	—		3
73	127	上	6	ゆゑもなく海が見たくて	—	492	
74	127	下	9	東海の小島の磯の	—		1
75	128	上	9	鏡とり／能ふかぎりの	—	24	
76	128	上	12	鏡屋の前に来て／ふと	—	38	
77	128	上	*7	すがた見の／息のくもりに	—	467	
78	128	上	*3	窓硝子／塵と雨とに	—	449	
79	129	下	9	汝が寝せしからたはずて	—	346	
80	131	上	*4	やとばかり／桂首相に	—	151	
81	132	上	1	東海の小島の磯の	—		1
82	133	下	*9	燈影なき室に我あり	—		13
83	134	上	*5	何となく、／今年はよい事	—		38
84	134	下	11	人がみな／同じ方角に	「方角」『創作』明44. 1		43
85	134	下	12	戸外には羽子突く音す	「方角」『創作』明44. 1		37
86	134	下	14	年明けてゆるめる心	「方角」『創作』明44. 1		35
87	135	上	6	ふるさとの寺の御前に	—	268	
88	136	上	1	ふるさとの／村医の妻の	—	216	
89	136	上	*11	晴れし空仰げばいつも	—	161	
90	136	上	*9	夜寝ても口笛吹きぬ	—	162	
91	138	上	*8	籠のごとくむなしき空に	—	65	
92	138	下	*9	青空に消えゆく煙	—	154	
93	139	上	3	砂山の砂に隠さひ	—	6	
94	139	上	5	やはらかに積れる雪に	—	42	
95	139	下	*1	教室の窓より逃げて	—	158	
96	140	上	1	不來方のお城の草に	—	159	
97	140	上	2	わが友は／今日も母なき	—	543	
98	140	上	*9	孩児の手ざはりのごとき	—	532	
99	140	上	*7	公園の木の間／小鳥	—	534	
100	140	下	*9	呼吸すれば、／胸の中にて	—		1
101	141	上	3	眼瞼づれど、／心にかが	—		2
102	141	上	8	ごおと鳴る風のあと	—	375	
103	141	上	11	空知川雪に埋れて	—	376	
104	141	下	*5	田も畑も売って酒のみ	—	211	
105	141	下	*4	酒のめは／刀をぬきて	—	231	
106	141	下	*3	あはれかの国のはてにて	—	387	
107	142	上	1	今日もまた酒のめるかな！	—		17
108	142	上	2	すつきりと酔ひのさめたる	—		19
109	142	上	*6	わがために／なやめる魂を	—	240	
110	142	上	*4	かの家のかの窓にこそ	—	249	
111	142	下	*8	石狩の都の外の	—	435	
112	143	上	1	長き文／三年のうちに	—	436	
113	143	上	5	いつなりけむ／夢にふと聴きて	—	415	
114	143	上	*5	親と子と／はなればなれの	—	73	
115	143	上	*3	旅を思ふ夫の心！	—		7
116	144	下	3	水晶の玉をよるこび	—	104	
117	144	下	4	大いなる水晶の玉を	—	106	
118	145	上	*8	しつとりと／なみだを吸へる	—	9	
119	145	上	*7	大といふ字を百あまり	—	10	
120	145	下	3	いのちなき砂のかなしきよ	—	8	
121	146	上	*10	あたらしき背広など着て	—	78	
122	146	下	5	秋の空麗夢として	—	277	
123	146	下	10	籠のごとくむなしき空に	—	65	
124	146	下	*5	痕のごとく思細のこころ	—	152	
125	146	下	*3	不來方のお城の草に	—	159	
126	147	上	8	どんよりと／くもれる空を	—	98	
127	147	上	*8	この四五年、／空を仰ぐと	—		79
128	147	下	*7	空家に入り／煙草のみたる	—	40	
129	147	下	*5	忘れ来し煙草を思ふ	—	367	
130	147	下	*3	腹少し痛み出でしを	—	369	
131	147	下	*1	しめらへる煙草を吸へば	—	474	
132	148	上	2	若しあらば煙草恵めと	—	525	
133	148	上	5	マチ擦れば／二尺ばかりの	—	541	
134	148	上	9	うつとりと／本の挿絵に	—		13
135	148	上	11	考へれば、／ほんとに欲しと	—		30
136	148	上	13	何もかもいやになりゆく	—		172
137	148	下	2	父のごと秋はいかめし	—	290	
138	148	下	3	燈影なき室に我あり	—	13	
139	148	下	8	よく怒る人にてありし	—	490	
140	149	上	2	かなしきは我が父！／■今日も	—		182
141	149	上	3	その親にも、／■親の親にも	—		157

No.	頁	段	行	引用歌	引用元	『一握の砂』	『悲しき玩具』
142	150	上	*9	ふるさとの寺の御廊に	—	268	
143	151	上	11	大といふ字を百あまり	—	10	
144	151	上	13	路傍の切石の上に	—	86	
145	151	下	5	ふと見れば／とある林の	—	498	
146	151	下	11	さいはての駅に下り立ち	—	383	
147	151	下	*8	ふるさとの旅なつかし	—	199	
148	152	下	1	やや遠きものに思ひし	—		147
149	152	下	*9	五歳になる子に、何故ともなく、	—		177
150	153	下	*12	こみ合へる電車の隅に	—	21	
151	153	下	*10	いつも逢ふ電車の中の	—	37	
152	153	下	*3	途中にて乗換の電車	—		14
153	154	下	3	人気なき夜の事務室に	—	480	
154	154	下	*9	遠方に電話の鈴の	—	111	
155	155	上	3	東海の小島の磯の	—	1	
156	155	上	*6	大海の／その片隅に	—	510	
157	156	上	4	浅草の夜のにぎはひに	—	22	
158	156	上	5	用もなき文など長く	—	473	
159	156	上	6	あたらしき心もとめて	—	127	
160	156	上	13	気弱なる斥候のごとく	—	521	
161	156	下	6	庭石に／ほとと時計を	—	138	
162	156	下	*4	見てをれば時計とまれり	—	482	
163	156	下	*2	ふと見れば／とある林の	—	498	
164	157	下	3	友として遊ぶものなき	—	236	
165	157	下	4	その後を我を捨てし友も	—	166	
166	157	下	7	飄然と家を出ては	—	15	
167	157	下	8	友よさは／乞食の卑しき	—	91	
168	157	下	10	蘇筆の書を我に薦めし	—	180	
169	158	上	4	かなしめは高く笑ひき	—	330	
170	158	上	5	十年まへに作りしといふ	—	405	
171	158	上	7	人並みの才に過ぎざる	—	99	
172	158	上	8	そのむかし秀子の名の	—	193	
173	158	上	10	友がみなわれよりえらく	—	128	
174	158	上	11	友われに飯を与へき	—	314	
175	158	上	*5	智慧とその深き慈悲とを	—	328	
176	158	上	*1	ひさしふりに公園に来て	—	533	
177	158	下	7	買ひおきし／業つきたる	—		187
178	158	下	8	友も妻もかなしと思ふらし——	—		146
179	159	下	12	いま、夢に開古鳥を聞けり	—		131
180	160	上	12	顔につたふ／なみだのごはず	—	2	
181	160	上	13	大海にもかひて——	—	3	
182	160	下	5	なみだなみだ／不思議なるかな	—	25	
183	161	上	10	垢じみし袷の襟よ	—	112	
184	161	上	12	それとなく／郷里のことなど	—	209	
185	161	上	*5	ひとしきり静かになれる	—	468	
186	161	上	*4	新しきサラダの血の	—	465	
187	161	下	2	新しきインクのにほひ	—	92	
188	161	下	*8	葡萄色の／長椅子の上に	—	513	
189	161	下	*6	時ありて／猫のまねなど	—	520	
190	161	下	*2	猫の耳を引つばりてみて、	—		70
191	162	上	2	猫を飼はば、／その猫がまた	—		179
192	162	上	5	庭のそとを白き犬ゆけり	—		194
193	163	上	5	友がみなわれよりえらく	—	128	
194	163	上	*9	放たれし女のごとく、	—		170
195	163	下	3	花散れば／先づ人さきに	—	168	
196	163	下	11	馬鈴薯のうす紫の	—	234	
197	163	下	*5	たはむれに母を背負ひて	—	14	
198	164	下	4	父のごと秋はいかめし	—	290	
199	165	上	11	己が名をほのかに呼びて	—	153	
200	165	上	*7	砂山の砂に腹這ひ	—	6	
201	165	上	*6	わが恋を／はじめて友に	—	197	
202	167	上	3	いたく鎮びしピストル出でぬ	—	4	
203	167	上	5	こそその語がやがて	—	82	
204	167	上	7	誰そ我に／ピストルにて	—	150	
205	168	上	9	ドア推してひと足出れば、	—		88
206	168	上	12	病院の窓によりつつ、	—		103
207	168	上	*10	看護婦の徹夜するまで、	—		106
208	168	上	*7	病院の窓のゆふべの	—	471	
209	168	下	2	夜おそく何処やらの室の	—		95
210	169	上	*8	漂泊の愁ひを叙して	—	320	
211	169	下	*5	高山のいただきに登り	—	34	
212	169	下	*3	六年ほど日毎日毎に	—	450	
213	171	下	*7	気弱なる斥候のごとく	—	521	
214	171	下	*6	皮膚がみな耳にてありき	—	522	
215	171	下	*5	気がつけば／しつとりと夜霧	—	524	
216	172	上	12	用もなき文など長く	—	473	
217	172	下	6	あめつちに／わが悲しみと	—	301	
218	172	下	8	雨後の月／ほどよく濡れし	—	278	

No.	頁	段	行	引用歌	引用元	『一握の砂』	『悲しき玩具』
219	172	下	*10	教室の窓より逃げて	—	158	
220	172	下	*7	汽車の窓／はるかに北に	—	245	
221	172	下	*6	かの旅の夜汽車の窓に	—	497	
222	173	上	3	窓硝子／塵と雨とに	—	449	
223	173	上	4	目を病める／若き女の	—	455	
224	173	上	6	晴れし目のかなしみの一つ！	—		94
225	173	上	*2	呆れたる母の言葉に	—	26	
226	173	下	5	はたはたと黍の葉鳴れる	—	270	
227	173	下	12	何がなしに／顔のなかに	—	110	
228	174	下	*11	かにかくに洪民村は	—	210	
229	174	下	*10	ふるさとの山に向ひて	—	252	
230	174	下	*8	神のごとく遠く姿を	—	409	
231	175	下	*11	心より今日は逃げ去れり	—	88	
232	175	下	*9	やまひある歌のごとき	—	200	
233	175	下	*4	やみて四月——／■そのとぎどきに	—		152
234	175	下	*2	やまひ癒えず、／死なず、／■日毎に	—		186
235	176	下	*10	宗次郎に／おかねが泣きて	—	227	
236	176	下	*8	京橋の渡山町の	—	489	
237	177	上	*11	ある朝のかなしき夢の	—	108	
238	177	上	*9	夢さめてふつと悲しむ	—	192	
239	177	上	*7	ふるさとの寺の御廊に	—	268	
240	177	上	*5	いま、夢に閑古鳥を聞けり。	—		131
241	178	上	7	いつも睨むラムプに飽きて	—	125	
242	178	上	*12	真白なるラムプの笠の	—	421	
243	178	上	*10	真白なるラムプの笠に	—	518	
244	178	上	*4	ことさらに燈火を消して	—	79	
245	187	上	*4	あはれ我がノスタルジヤは	—	235	
246	187	上	*3	病のごとく思細のころ	—	152	
247	189	上	*2	みぞれ降る／石狩の野の	—	364	
248	189	下	*5	浪淘沙／長くも声を	—	414	
249	192	下	*5	神有りと語り張る友を	—	173	
250	193	上	*6	クリストを人なりといへば、	—		192
251	196	下	2	呼吸すれば、／胸の中にて	—		1
252	205	下	*11	引越の朝の足もとに	—		74
253	205	下	*10	放たれし女のごとく、	—		170
254	209	下	7	はたらけど／はたらけど猶	—	101	
255	209	下	8	赤紙の裏紙手擦れし	—	507	
256	209	下	9	邦人の顔たへがたく	—	115	
257	209	下	11	やや遠きものに思ひし	—		147
258	209	下	11	ポロオジンといふ露西亜名が、	—		144
259	209	下	12	寝つつ読む本の重さに	—		122
260	210	下	*2	藤沢といふ代議士を	—		113
261	219	上	8	かにかくに洪民村は	—	210	
262	219	上	*4	石をもて追はるごとく	—	214	
263	220	上	2	やはらかに柳あをめる	—	215	
264	220	上	3	石をもて追はるごとく	—	214	
265	220	上	*8	あはれかの我の教へし	—	212	
266	220	上	*7	ふるさとを出て来し子等の	—	213	
267	223	下	*4	かなしきは／飽くなき利己の	—	43	
268	229	上	11	函館の青柳町こそ	—	315	
269	231	上	*4	浅草の夜のにぎはひに	—	22	
270	232	下	*2	いつも逢ふ電車の中の	—	37	
271	233	上	3	浅草の夜のにぎはひに	—	22	
272	235	中	11	その後を我を捨てし友も	—	166	
273	237	下	*1	大いなる彼の身体が	—	55	
274	238	上	2	おれが若しこの新聞の	—		58
275	242	上	*9	誰そ我にヒストルにても	明治四十三年歌稿ノート	150	
276	244	中	*6	二日前に山の絵見しが	—	206	
277	244	中	*4	かにかくに洪民村は	—	210	
278	244	中	*2	汽車の窓／はるかに北に	—	245	
279	244	下	1	ふるさとの山に向ひて	—	252	
280	244	下	3	目になれし山にはあれど	—	265	
281	244	下	5	神無月／岩手の山の	—	275	
282	244	下	7	岩手山／秋はふもとの	—	289	
283	248	中	3	ふるさとの誰なつかし	—	199	
284	248	中	3	二晩おきに、／夜の一時頃に	—		15
285	250	下	*3	ある年の盆の祭に	—	220	
286	252	上	10	わが村に／初めてイエス・	—	243	
287	253	上	*2	軍人になると言ひ出して、	—		111
288	253	中	1	うつとりとなりて、／剣をさげ、	—		112
289	255	下	2	とるに足らぬ男と思へど	—	324	
290	257	下	*2	しらなみの寄せて騒げる	—	318	
291	258	上	1	巻煙草口にくはへて	—	325	
292	258	上	*8	砂山の砂に腹這ひ	—	6	
293	258	上	*7	潮かきる北の浜辺の	—	304	
294	259	下	*9	港町／とろろとなきて	荻浜の羽山姫神社歌碑	486	
295	262	下	10	手が白く／且つ大なりき	—	47	
296	275	下	*7	跡をとる看護婦の手の、	—		96

No.	頁	段	行	引用歌	引用元	『一握の砂』	『悲しき玩具』
297	275	下	*5	脈をとる手のふるひこそ	—	—	135
298	275	下	*3	いつとなく記憶に残りぬ——	—	—	136
299	276	上	*3	看護婦の徹夜するまで、	—	—	106
300	280	中	*1	空家に入り／煙草のみたる	—	—	40
301	285	中		4 京橋の瀧山町の	—	—	489
302	285	中		8 春の雪／銀座の裏の	—	—	453
303	286	下	*1	さいはての駅に下り立ち	—	—	383
304	287	中	*6	しらしらと氷かがやき	—	—	384
305	289	下	*2	咽喉がかわき／まだ起きてゐる	—	—	4
306	290	中		4 小学の首座を我と	—	—	218
307	290	中		6 千代治等も長じて恋し	—	—	219
308	291	中	*2	邦人の顔たへがたく	—	—	115
309	299	中		11 霧ふかき好摩の原の	夜更けの森園地稲荷山の歌碑	—	244
310	300	上	*8	かの旅の汽車の筆掌が	—	—	155
311	300	中	*1	不來方のお城の草に	—	—	159
312	301	上	*4	教堂の窓より運けて	—	—	158
313	301	上	*2	城址の石に懸掛け	—	—	165
314	301	下		4 赤紙の表紙手擦れし	—	—	507
315	302	下		6 近眼にて／おどけし歌を	—	—	194
316	304	中		5 よりそひて／深夜の雪の	—	—	392
317	304	中		7 死ぬはかり我が酔ふをまちて	—	—	396
318	304	中		9 舞へといへば立ちて舞ひにき	—	—	395
319	306	中		9 おちつかぬ我が弟の	—	—	478
320	308	上	*9	いつも来る／この酒肆の	—	—	500
321	308	上	*7	赤赤と入目うつれる	—	—	464
322	312	上		8 新しきサラダの皿の	—	—	465
323	312	上		10 あたらしきサラダの色の	—	—	126
324	316	下		11 その昔／小学校の	—	—	203
325	318	中		2 かにかに／洗民村は	—	—	210
326	336	下	*1	ストライキ思ひ出でも	—	—	171
327	338	下	*3	何時なりしか／かの大川の	—	—	472
328	338	下	*1	大川の水の面を	—	—	327
329	346	上		5 五歳になる子に、何故ともなく、	—	—	177
330	346	中	*9	空知川雪に埋れて	—	—	376
331	352	中	*6	京橋の瀧山町の	—	—	489
332	353	下	*1	頬の寒き／流離の旅の	—	—	416
333	354	上	*5	かの声を景一度聴かば	—	—	429
334	354	中	*1	山の子の／山を思ふが	—	—	425
335	354	中	*9	君に似し姿を街に	—	—	428
336	354	中	*7	わかれ来て年を重ねて	—	—	434
337	360	下	*4	船に酔ひてやさしくなれる	—	—	309
338	363	中		9 みぞれ降る／石狩の野の	—	—	364
339	364	上		5 はづれまで一度ゆきたしと	—	—	137
340	365	上		11 秋近し！／■電燈の球の	—	—	190
341	367	下	*9	曠野より帰るごとくに	—	—	526
342	371	中		9 浅草の夜のにぎはひに	—	—	22
343	374	下	*11	蘇峯の書を我に薦めし	—	—	180
344	377	上		4 よく叱る師ありき／眞の	—	—	163
345	377	上	*6	目が才に身をあやまし	—	—	182
346	383	中		7 藤沢といふ代議士を	「寝台の上より」『創作』明44.3	—	113
347	389	中	*2	皎として玉をあざむく	—	—	254
348	389	下		1 青に透く／かなしみの玉に	—	—	256
349	389	下		3 秋来れば／恋ふる心の	—	—	291
350	390	下		9 酒のめば／刀をぬきて	—	—	231
351	392	下		8 東海の小島の磯の	—	—	1
352	393	上		3 潮かをる北の濱辺の	愛宕公園(野辺地)歌碑	—	304
353	398	中		8 わがあとを追ひ来て／知れる	—	—	308
354	401	上	*2	石狩の空知郡の	—	—	59
355	407	下	*9	目になれし山にはあれど	—	—	265
356	408	上		7 あをじろ類に選を	—	—	360
357	408	中		2 愁ひ来て／丘にのぼれば	—	—	262
358	416	中		6 かの家のかの窓にこそ	—	—	249
359	417	中	*1	二晩おきに／夜の一時頃に	本郷切通坂歌碑	—	15
360	430	上		7 藤のごと／思懐のころ	盛岡天満宮歌碑	—	152
361	438	上		13 その後に我を捨てし友も	—	—	166
362	439	中		12 ある日、ふと、やまひを忘れ、	—	—	181
363	443	下	*10	石狩の都の外の	—	—	435
364	445	中	*6	「労働者」「革命」など	—	—	159

(注) 近藤典彦編『悲しき玩具 一握の砂以後(四十三年十一月末より)』(桜出版、2017)は新たな歌番号を付すが、本表は広く行われているものに依う。

※引用歌は『石川啄木全集 第一巻(筑摩書房、1978)に拠つた。ただしNo.294,309,352,359,360は碑文(写真)に拠る。また、『一握の砂』『悲しき玩具』の本文は初版本(国立国会図書館デジタルコレクション)も参照し、『一握の砂』65の「竜」を「龍」とした。

※「啄」は本来は牙付き、書体が無いので「啄」で代用した。